

特55-820



•1200800247475•

55

日  
便  
利  
用  
德  
用  
之  
一  
等

55



始





月色赤ま白き時の雨赤き風をうり

○片面を免の布みて三歳衣をもつ法

多ち方の

そで	そで	みみ	みみ
そで	そで	みみ	みみ
そで	そで	みみ	みみ
そで	そで	みみ	みみ

○石油火止手が多徳用の法

石油ふ志ろを入れてともせり火止あり油のへり方も少  
なく燈光も何きらかよて極徳用の法あり

○石油ふ火の附き多るを消す法

蒲團の類を以て蔽ひてけをあれども衣ト品の間にお不  
れそのもの動し難き時の灰汁を注ぐをよいとせ

○らんぶのけむりを止る法

燈心をつよき醋に浸し乾し用あれが烟らぬのみをうら  
よく燃ゆるをうり

○烟筒の罅を防ぐ法

釜の水を入れホヤ其中へ入て初めぬるき火より次第ふ  
強き火ふふ沸騰て半時斗り過し釜を下しそのち置く

て冷し後烟筒を取出すなりひゞされるとき

○鍋釜鐵瓶の銹を除る法

蕎麥湯も入れて一度よく煮れば銹の出るなり

○同く漏りを繕ふ法

硫黄二分黒鉛粉一分を他の鍋の中へ硫黄を入れ火の上  
け溶る時鉛粉を加へよく交る迄攪拌し後之を火よりお  
ろし鐵板又ハ平坦なる清き石の上へ漉き全く冷むる時  
細り細き繕ふ至き鐵器を火炙り此粉を用ゐて隨意

不修復を加ふなり

○陶器の何れを修理する法

何れを修理せんと思ふ処を炙き一二度火へ鑽かしてめが  
孔があきぬ

○同漏りを止める法

線香を細くし飯粒を煉り合せて其瑕所を塗り込むなり

○同接合糊の製法

石灰を絹篩し卵の蛋白を以てよく練り用ゐるなり

○蚊よけの法

胡椒の末半匙赤砂糖一匙乳酪一匙をよく混ぜ皿に盛り  
蠅の集る処に置れば忽ち外へ飛び去るあり

○蚊をよける法

椿の花をかきおろし水に入れてそれをあけばちつとも寄りつかぬと妙あり

○蛋鼠をよける法

胡椒子六十粒細末に樟腦八粒と混合し綿布の袋に入れ  
ておぼろに置くべし蛋鼠を除く妙あり

○糊ふて張りたる物鼠のつかぬ法

のりの中にお菓凍をまき少く加へて張れば鼠くもせず又電  
の灰を糊ふまぜて張るもよし

○頭鼠陰鼠を除く法

胡椒の末を水で溶いて二三回ぬれば種がつかず走足も  
まもなくなくなるなり

○鳥獸の鼠をのぞく法

硫黄を振り注けるが最良法なり

○樹木の虫をやむ法

海鼠を木の枝にかけ置ると蟲皆死するのちなり

○顔皮膚の色を白くする法

雲花菜を搗盆してすりこれ小卵の蛋白少許を加へ又水をもまぜ毎夜寝前小顔其外白く志よふと欲ふとあつ小塗り怠らばこれの色白くをえたり

○おもしろの着をよくする法

シセキを齒又壺り五倍子をつくぞバ忽ちつきて又脱る  
とあそ

○髪の色を赤くし艶を出す法

桐の木を煎ト髪を洗へバ赤きと黒くをり又艶を出すハ菜種の油を付せバ毛を長しつやを多し事奇妙なり

○髪の色を直しつやを出す法

麻と桑の葉を等分ふせんと常々洗ふと縮きを直しつやを出せと妙なり

○髪のもまやま法

葡萄酒三握りをよくつき碎れその汁を搾り蜂蜜三匙入  
てておる所を洗ふなり尤老年にてまげあるは無益あり

○飯の早ぶに三徳法

米をよくゆでに常より多く水を入れ釜の上木綿切又ハ厚  
紙を蓋とし其上小釜のふちを以て常の如く火を焚き釜  
よ豆飯氣出さ時ハ直小燃火を引て少時置なり飯よきか  
げん小焚上り早く薪少しホて三徳あり

○ものを水の軟く煮る法

蠶豆既豆ふど煮る小炭酸曹達少し許り入を早く煮て大  
徳用なり

○菜をやまあか小漬法

炭酸曹達を少しついで一層目小ふりうを漬けせぬ齒を  
の老人小は容易小噛まぬあり

○炭火は移るを止る法

炭火の中へ志布を一挿入ぬ火のま移るを止る

○甘酒を即堅おつくる法

道明寺壺<sup>どうめいじ</sup>を湯で洗ひあげそれ小瓶<sup>こびん</sup>一升水<sup>みづ</sup>舂<sup>ぶ</sup>五合入<sup>ごがういれ</sup>きす  
至<sup>いた</sup>むちおつてよくすり水<sup>みづ</sup>裏<sup>うら</sup>おてそれを漉<sup>こ</sup>し鍋<sup>なべ</sup>お入<sup>いれ</sup>きどろ  
ゆ<sup>ゆ</sup>ちおねぎ<sup>ねぎ</sup>バ即<sup>すぐ</sup>堅<sup>かた</sup>おで取るなり

○常<sup>つね</sup>の鉄<sup>てつ</sup>おて硝子<sup>しょうじ</sup>を剪<sup>き</sup>る法

硝子板<sup>しょうじばん</sup>を水中お入<sup>いれ</sup>きて平<sup>へ</sup>らおりち斜<sup>さか</sup>おをらざる様<sup>よう</sup>よ  
て板<sup>いた</sup>の周<sup>まわ</sup>縁<sup>えん</sup>を少<sup>すく</sup>づのぞみの形<sup>かたち</sup>よ切<sup>き</sup>るあり実<sup>じつ</sup>お新<sup>あらた</sup>發<sup>はつ</sup>  
明<sup>あきら</sup>も云<sup>い</sup>ふ登<sup>のぼ</sup>り

○ガラスお書画<sup>しよゐ</sup>をかいてナゲぬ法

硝子<sup>しょうじ</sup>を能<sup>よく</sup>く洗<sup>せん</sup>ひ磨<sup>こ</sup>て墨<sup>すみ</sup>名<sup>な</sup>のぐおて寫<sup>か</sup>しぬる火<sup>か</sup>よて乾<sup>かわ</sup>  
左<sup>ひだり</sup>の茶<sup>ちや</sup>をそろく平<sup>へ</sup>よ流<sup>なが</sup>し再<sup>また</sup>びかきおをる

藥方

エロ、ホルムセ五匁 エーテル廿五匁  
琥珀<sup>こはく</sup>三匁 三種<sup>さんしゆ</sup>を空<sup>くう</sup>か漉<sup>こ</sup>し用<sup>もち</sup>べ

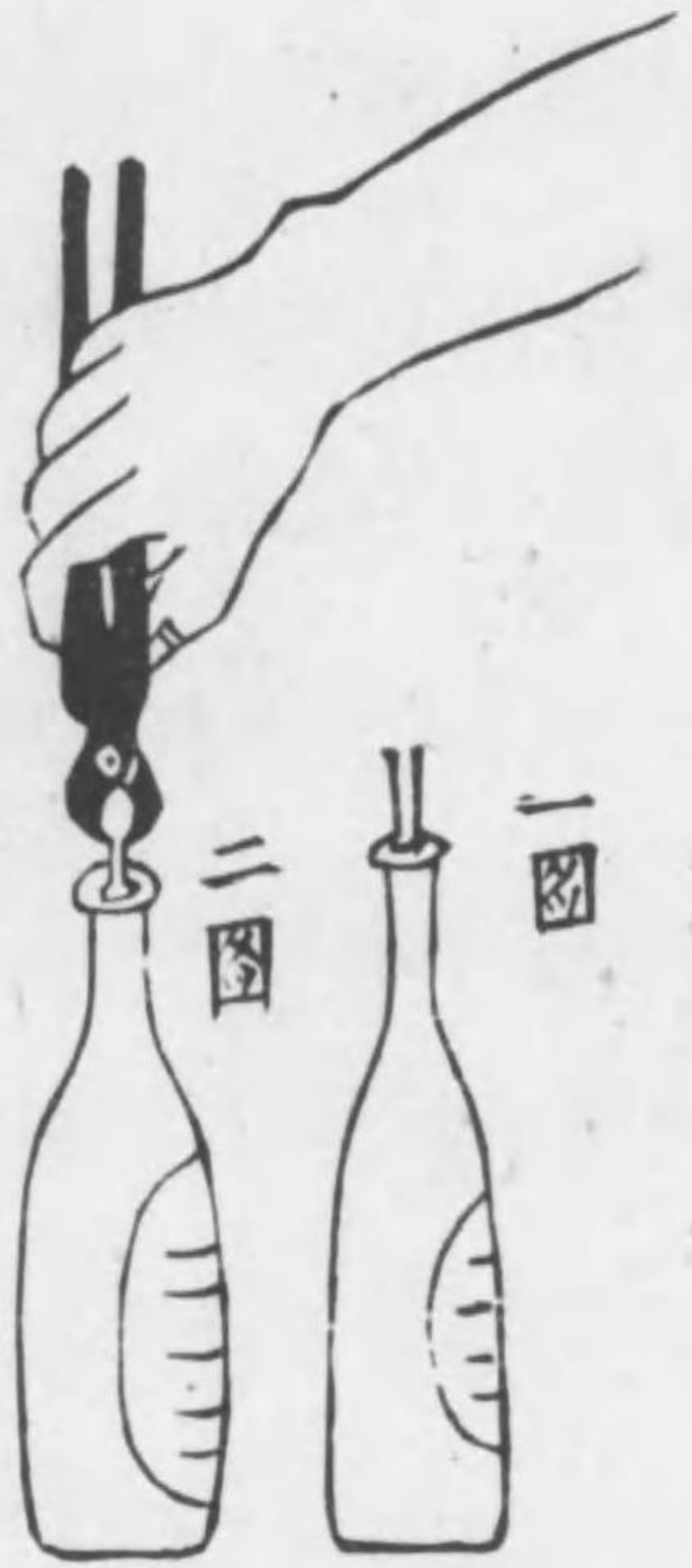
○エロツプを抜く法

壺<sup>か</sup>図<sup>ず</sup>の如<sup>ごと</sup>く小<sup>こ</sup>きき釘<sup>くわい</sup>二本<sup>にほん</sup>を栓<sup>せん</sup>木<sup>ぎ</sup>おき一<sup>ひと</sup>込<sup>こ</sup>み二<sup>ふた</sup>図<sup>ず</sup>の如<sup>ごと</sup>く  
釘<sup>くわい</sup>抜<sup>ひ</sup>おて左<sup>ひだり</sup>右<sup>みぎ</sup>よ至<sup>いた</sup>る免<sup>めん</sup>よせざるよお挟<sup>はさ</sup>み静<sup>しず</sup>かお抜<sup>ひ</sup>く登<sup>のぼ</sup>



○衣もの油を脱ぎ法

油が衣服などについた多分時の蘿蔔の搾汁を油のついた  
ふ処に塗りつゝ熱湯にて流へば直ぐ落ちるなり



○墨油をぬぐふ法

油のあがらぬ多分水を速くかゝれば水も油も入らな  
りおれを拭ひ取ると油のあといつかさる新發明あり

○油紙お字をかき法

皂角を一夜水に浸けその水に墨をまじりこくことなり

○餅の黴ぬ法

捏じまの水分砂糖をかきこいて少く入用ふれば久し  
貯へておかひるなり

○雪院の臭氣を止る法  
樟腦せうなんを紙し小包みせつゝみんの中なか入つる―置けハ臭氣くさいを止  
る事妙なり

○朝顔の花をいろくいろく不咲さく法  
朝顔の種子たねを醋すよて浸ひ―後乾あ―蔭かげく乾あ―花の色種々いろくニ  
変りかりかるる

○梅の花を墨色すみいろ不咲さく法  
苦楝く楸しゆ子こ梅ばいを接つぐありその花必かなず黒く咲さくなり是ハ奇  
妙くせうの法ほふなり

○文字を水面すゐめん不浮うババ法  
黄芩きんを磨こり紙し不文字ふもじを書き是を小桶こづく又ハ銅盥どうげんの水みづニ入  
きて徐ゆるか不ふその紙を沈しづむむ―文字ハ水面すゐめん不脱ふだつ浮うりて奇  
妙くせうなり

○冷飯ひやめえを焚立たきあのおととをとる法  
釜かまを煖ぬめ之の不冷飯ふやめえを入いれ水みづを少許せうこ釜の内側うちがはへへちち―堅  
く蓋ふたをふたた―暫しばくく―飯桶いひづ不ふ移うつるる―焚立たきあの如ごとく

○むし歯の痛を止める法

精製砂糖壹錢胡椒七分塩五分を菜研なふて極末くわくまふちろし  
是をぬるき火ふしの湯溶しよくまぜて碗豆ほどの大きさ  
ふまざる灸痛む齒の陷齒の中ふつめるなり

○口中のふたりのあぶきを治す法

硃砂しゆさ二分真砂ま一分此二味細末ふして混ませて口中の腫物ふつく  
なり

○霜や雪のそと

むぎ柿の能く煮ぬく一匁をみつあせハ治するを妙なり

○輝薬の法

蜂蜜ちゆうろうを煮て上面は浮ひたるものをとひ取り洗濯しぬる  
後一あ滴を掌てのひらに落しよく塗りつるなり

○やぶやみのくすり

飴い飴粉いんこを厚くやけぞの處へぬり上を木綿とんにて包み置け  
なり

○そとまを治す法

鯨をけつり 糊子あで 附せし 速よきをぬたり

○やげぬきのをまゆり

とげのたちある處に甘草をかみてつければ少々の自然  
お抜け出るなり深くいりあるの度々附る

○淋病消渴を治す法

水三合に鶏卵一ツ 燈心三把を入一合五タおせんト用ゆ  
べし癒るを神の如し

○衄血を止る法

足のゆびを水に濡らしてつければ止るなり

○靴づきを治す法

宝丹を飯粒で砕いてつるればちよをるなり

○狐臭を治す法

枯礬少し斗り一日お死て一回づつ塗り附へし 治功妙なり

至

○疝ぶとをなす法

疝の痛みあるがとき坤龍を粉朱を少許とねり合せ

紙に附て種れあふ二時間を貼りおけば痛みうろく種  
きり破れて妙功を知らざるを

○頭瘡の愈え方

煮あふる胡麻油を日々三四度づつぬる

○陰罩輪扇の薬

子石鹼を毎日沐浴の時陰囊を洗へば四五日にて癒る  
あり

○志びれを治す法

掌を以て足先を遊ば摩擦ると血のかよめを促すゆへに志びれ  
ある者なり

○目をまぶらぬ法

雨水一斤の中へ亞鉛毒を入て毎朝眼を流へば眼病の  
患なき

正價金五匁

明治二十年 三月十四日 御届

編輯者 出板人

岡田常三郎  
神田區赤廣町拾番地

終

